

大学振興部会（第4回）における主な意見の概要

（1）成績評価への信頼性の確保や学修成果の把握・可視化について

- 質保証、出口管理という意味では、GPAをもう少しちゃんと使うようにすることが重要。例えば極端に低いGPAの場合は卒業できないといった工夫も今後必要。
- 学修成果の可視化をどうするかということが一番重要だろう。認証評価の第3期では、内部質保証がキーワード。内部質保証は教育の質保証だから、どういう形で学修成果を可視化していくのかということと直結する。各大学がそれぞれのやり方で質保証することになっているので、ここを強化していくことがまず重要なのではないか。

（2）ST比の改善等による教育体制の充実について

- ST比の改善による教育体制の充実は分かりやすいKPIとは思えない。色々な分野、レベルの大学もあるので、これ自体をKPIと捉えるのはいかがなものか。
- ST比は、教育にとってのインプットであり、ラーニングアウトカム、学修成果と言っているときに、これを指標にするというのは疑問。
- ST比については、ミクロレベルで、例えば、15名以下の少人数の授業科目が全体の科目の何%あるといった指標の公表を求めることは必要なのかもしれない。
- ST比が高い社会科学系学部はアクティブ・ラーニングの実施率が比較的低く、卒業論文も課していないとするデータもあるが、文化系の私立大学にとっては死活問題かもしれないし、総合大学も文系の収入によって理系の赤字を埋めている構造のところがあるので、ST比という観点で議論を進めることは妥当かどうか議論を深めたい。
- ST比を小さくすることは簡単にできるとは思えないが、それに代わるような密度の濃い学修をどう組み立てていくかを考えるべきではないか。
- ST比に関係する議論が難しいのは、大学、学部、学科など、どの単位で捉えるかということから議論しなくてはいけない。質保証システム部会では、学生の立場から、例えば、大教室授業であったとしても、それをフォローするようなTA等を置くことが重要だという議論がなされ、設置基準の中で、教育の補助者を設置基準の中に位置づける議論に結びついた。学生の学修の質を高めるためには、どういうシステムが必要なのかということ踏まえておいたほうがよい。

- ST比について、やはり学生の立場から見ると、どういう大学教育を受けられるかという観点では軽視できない、判断材料にしたいという点だと思う。極端にST比が高い大学では卒業研究も指導しきれない、指導を受けたくても受けられないということがあり、少なくとも実態把握、少人数科目の割合とか、より教育の質に関係するような形で把握をすることが大事かと思う。

(3) 「密度の濃い主体的な学修」を促す観点からの工夫等について

- 学生の4年間の学びが歪になっており、1年生、2年生でたくさんの科目を取って、学年が3年、4年になると、就職活動ということもあり、ほとんど授業に出ない。これを均等にするというのが非常に重要。
- 科目数が多過ぎると浅い学びになってしまう。キャップ制を導入している大学もあるが、形式化していて、年間上限50単位までとか、全くキャップ制の意義が分かっていないような形で導入している大学もあるので、ここをしっかりとやってはどうか。それに加えて週複数回開講により、一つの科目をしっかりと深く学ぶこと、密度の濃い主体的な学修を可能とすることが必要。

(4) 卒業論文・卒業研究、ゼミ等について

- 最近では学生が大学で何を学んだのかを見ている企業というのも増えた。そこで、集大成である卒業論文にもっとスポットライトを浴びせてもいいのではないか。企業においても、何かプロジェクトをやったり、新しいことにチャレンジしたりするときには、卒論と同じように多くの文献やネットで調べて、論理構成を考え、文章を書かなければいけない。学生からすれば、それまでの人生では経験したことのない一大プロジェクトを経験しておくということは大切ではないか。
- 個々の授業科目の成績評価はある意味で形成的評価であり、やはりもう一つの評価である総括的な評価というのも、質保証については必要。そういう意味で、卒業研究とか卒業論文というのも必要かと思う。
- 卒業論文・卒業研究等に関するデータの最新のものがあれば参考としたい。

(5) 産業界との連携・協力等について

- 文系でも、経営学部などで、プロジェクトを企業と一緒に組み立てて、最後にプレゼンをして、その評価を一企業の人たちと教員とでやるといったことは有効な

ことだろうと思う。工学部とか理学部等で企業の研究所の人たちと一緒にやっ
ていくということも当然非常に有益だろう。

- 産業界とどのような連携・協力ができるか。卒業研究やゼミの中で、あるいはそ
のほかの単位の中でちゃんと修得できていないものがあるのなら、それに企業が
協力してもらってもいいのではないか。どうしても課題を解決できないというの
なら、卒論のゼミなどで徹底的にそこを集約して指導すればいいし、産業界にも
積極的に出てきてもらうのもいいのではないか。

(6) その他

- 大学の質保証の本質として、大学卒業時点で学生がどういう能力を身につけてい
るのかが、社会や企業などの第三者から見て分かりやすく理解できるものでない
といけない。
- 卒業時の出口の質保証という観点からは、各授業科目が学修成果、DPと紐づけら
れて、その上で、各授業科目できちんと成績評価がなされていれば、124単位の
取得が、DPをきちんと獲得した上で卒業できているという証になるかもしれない
が、必ずしもそうならない。
- 少ない時間でいかにいい点を取るかということが、高校でうまくやっけていく、入
試に通る方法だろうが、それを大学、高等教育に持ち込めば、やはりできるだけ
低い点で卒業して学位記をもらうということになるだろうかと思う。高校教育との高
大接続の中で考えていく必要があるのではないのか。